学際・国際関係と交通社会を考える上での共通項と異質項

交通社会学の視点から

鈴木春男　Haruo SUZUKI

千葉大学名誉教授

古い話だが、国際交通安全学会が発足して10年に満たなかった1981年に、宮川洋PLの「交通と通信の代替・補完関係(IATSS633)プロジェクト」に参加させていただいた。交通とはヒトやモノが情報を伴って移動すること、通信とは情報だけの移動と規定し、通信の発達が交通問題を解決できるかが研究課題であった。そこでは、両者の関係には「代替」「補完」「相乗」の三つの関係がある。代替とはいうまでもなく通信によってモノやヒトが移動しなくて済むようになる関係、補完とは通信によって交通移動の質が高まり、結果的に無駄な交通が少なくなる関係、相乗とは通信によってかえって交通が刺激・誘発される関係であるとされている。

それからすでに30年以上が経過し、交通手段はさらに多様化・高速化しているが、それ以上に通信手段は劇的に変化発達してきている。10年後の理想的な交通社会を考えるに当たって、交通と通信という共通項を持ちながら、同時に異質な部分も持っている両者の関係を考える必要性はさらに高まっているように思われる。

この共通項と異質項という関係を考えるに当たって、私が若い頃共訳し、中央公論社の世界の名著にも入っているジンメルの『社会的分化論』を取り上げてみたい。彼は、集団が大きくなると、その凝集性を高めるために「集団分化」と「個人分化」という二つの方向性が同時に強調されなければならないと述べている。

集団分化とは、その集団が他の集団から分化することで、これはメンバー固有の共通項を強調することに通じる。メンバーが同じ考えや共通した体験を持っていればその結束は固まるというのは常識的にも理解できることである。

しかし、ジンメルの面白さは、そうした方向性も重要だがそれだけでは集団の凝集性は高まらない、それと同時に「個人分化」の方向性が打ち出されなければならないとしている点である。個人分化とは、集団の中の個人が他の個人から分化すること、すなわちメンバーの異質性、個性が強調されることである。

人間関係が密になるのは共通項によってばかりではない。お互いに相手がないものを持ち合っているために相互に個性・特性を出し合って役割分担し相互補完しあえる。そのことが人間関係の深さに結び付くというのである。

このことは集団生活の場だけでなく、学際研究や国際協力、さらに複雑化した交通社会を考えていく上にも応用可能な重大な示唆を与えてくれるものである。例えば多様化した交通手段がそれぞれ個性を発揮し、市民権を得て共存できる交通社会ができたらすばらしい。

国際協力の場でもこのことはいえるだろう。著名な社会学者有賀喜左衛門は、1979年に病床での最後の論文「外国文明と日本文化－新しい文明論－」の中で、文明とは技術に代表されるような国際的に移動可能なもの、文化とはある民族が持つ個性的な生活全体を意味し、こちらのほうは移動できないものと論じている。

明治の近代化の中で提唱された「和魂洋才」というスローガンも、日本とは異なった性格を持つ西洋文明が日本に輸入されて、これが日本に定着するには日本の文化すなわちわが国固有の政治的社会的経済的心理条件に結び付かなければならなかったことを示している。

1965年東京大学文学部助手。69年千葉大学教養部専任講師。同部助教授、人文学部助教授を経て83年文学部教授。2003年自由学園最高学部長、千葉大学名誉教授(現在)。科学警察研究所顧問、その他交通関係諸団体の理事を務める。（理事／1979年会員就任）